

家族志向で行う地域包括ケア

— 地域で家族セルフケア機能を支援する —

笠間市立病院 石塚 恒夫

家族志向ケアは、全人的医療の第一歩と考えられます。全人的医療では患者を生物学的側面（疾患（disease））だけでなく、家族背景や社会背景を持った心理社会的存在（病い（illness））として理解・共感することが求められます。家族志向ケアでは、家族を結婚で生まれる一つの生命体のようなものとして捉えます。家族という生命体は、子育て・子どもの独立・親の介護・配偶者の死・介護などの発達課題を乗り越えることで成長します。その移行期にはストレスがつきものであり、精神的もしくは身体的な「病い」が発生しやすくなります。しかし、家族の一人一人が自分の役割や考え方を変えることで、全体のバランスを保つことができるのです。これを家族のセルフケア機能と呼び、その機能が発揮できるよう支援するのが家族志向ケアです。

近年、家族の小規模化に加え、家族への従属より自立生活を重んじる個人主義的な家族規範が広まっています。子どもがいても遠隔地に家を建てており、戻ってこないのはむしろ普通のことです。晩婚化・未婚化により、老親と未婚の子のみの家族も珍しいもので

はありません。家族セルフケア機能の弱体化に伴い、家族志向ケアの主な対象は小児虐待や不登校等から脆弱高齢者へと変化しています。

現在、構築が進められている地域包括ケアとは、医療と介護等が連携することで住み慣れた地域での生活を維持する仕組みです。家族のセルフケア機能（以前なら配偶者や子ども）に頼れない分を、地域の公的・非公的資源で補完する目的で整備されているとも言えるでしょう。確かに家族介護のために結婚・出産等が制限されるのは理不尽であり、公的な介護や高齢者医療の充実が不可欠です。しかし、高齢者自身を援助するだけではなく、家族の高齢者支援を援助する視点も必要です。家族の一人ひとりの立場にも共感し、一人ひとりに無理ない範囲で協力してもらうよう妥協点を見つけ出します。地域包括ケアは家族ケアの補完に過ぎないということを、医療・介護スタッフは自覚するべきです。家族という生命体の中で相互支援する家族セルフケア機能こそが、家族の持つ精神的安らぎの源泉なのではないでしょうか。

笠間の歴史探訪 17

小原地区の古墳の調査

小原は、「常陸風土記」の那珂郡の条にある「茨城の里」で、茨城がなまって小原となり、茨城の名の発祥の地ともいわれています。このようなことから、小原地内には、原始から古代にかけて継続する遺跡が多く、かなり栄えた地であったと推定されます。

昭和五十年（一九七五）小原古宿の広慶寺墓地造成中に、高寺古墳群二号墳の石室が露出したことから、古墳の調査が行われました。主に埋葬施設のみの調査でしたが、石室は、花崗岩の大きな割石を用いた片袖式の横穴で、内部から直刀七振、鉄鍬二十三点、刀子、つば等の鉄製品、銀環、切子玉、管玉、ガラス製小玉等や残された墳丘から、武人埴輪片、円筒埴輪片、提瓶一個が検出されました。被葬者は、七世紀ごろの有力氏族で、小原が旧茨城国の中心でもあったとする説を裏付けるとともに、古代氏族の解明に一石を投じる意義深い調査でした。

笠間市では、この二号墳を市指定文化財【史跡】として復元

し、保存状態のよい出土品は市指定文化財【考古資料】に指定して、笠間市立歴史民俗資料館で保存、展示しています。古墳とあわせて出土品を鑑賞し、古代の文化にふれてみてはいかがでしょうか。

（市史研究員 能島 清光）



高寺二号墳出土遺物
（笠間市立歴史民俗資料館）



高寺二号墳